日刊 動労千葉

81.10.1

No. 858

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一－八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

三里塚・ジェット闘争貫徹！「国鉄35万人体制」粉砕！

乗務員分科は、動労千葉前進の魁になろう

80年代に勝利する「自前の労働運動」を先頭できりひらく確信にあふれて、熱心な討議がなされた。（於、御宿・外房荘、9月28日～29日）

第4回 乗務員分科定期委員会開催さる

第四回乗務員分科定期委員会は、九月二八日～二九の両日、御宿・外房荘において委員・傍聴者を含めて五五名の結集をもって開催され、日本労働運動総体が労線「統一」に象徴される右傾化の道を進みつつあり、この潮流に抗して闘い抜く方針を満場一致決定し成功裡に終了した。

確信深めた三月決戦ストを

第一日目、委員会は、議長に佐久間委員（千転）を選出し開催され、一年間の闘いの経過と総括が大岩副会長より大綱次の通り提案された。

①今春闘の前段に闘った八一・三ジェット燃料延長阻止の闘いは、日帝鈴木反動内閣が押し進めている軍事大国化路線＝改憲策動に対し、労働者階級の怒りの闘いであり、低迷する日本労働運動にかつを入れる闘いである。

②政府・国鉄当局が強力に推進しようとしている国鉄三五万人体制合理化攻撃は、単に国鉄職員を八五年までに七万四千人を削減し、三五万人にするということにとどまらない。

日本の支配者階級は、現在の危機的状況を打開するための唯一の道としての軍事大国化の道へとの「三里塚二期阻止・35万人体制粉砕へ！」

めり込んでおり、そのためには、国鉄労働運動の解体が必要不可欠の要件としてある。従って「三五体制」攻撃の本質が、国鉄労働者の既得権を全て剝奪し、国鉄労働運動解体の攻撃であるという視点をはっきり確認しなければならない。

③「六・一二津田沼事件」は、動労「本部」革マル分子が、動労千葉との組織争闘戦に敗北し、の組織の弱体化に焦ったが故に、動労千葉の組織破壊攻撃に警察権力の力を利用し、泣きつかなければならなくなったという事に本質がある。権力・当局の先兵としての本性をあらわにして、労働者に敵対する彼らを、今こそ全職場から解体＝一掃するために闘いを強化しなければならない。

第二日目、九時より再開された委員会は、一九八一年度運動方針(案)が提起された。

①国鉄三五万人体制合理化攻撃粉砕の闘いについて提起し、この攻撃の本質は、八〇年代に見合った支配体制を確立するため、労働組合の産報化を目的とした攻撃である。従って過去数度の合理化攻撃とはまるで異質なものであり、この攻撃と闘うには、日本支配者階級が今とろうとしている攻撃の基本軸＝三里塚に象徴される人民の抵抗を全て暴力的に叩きつぶし、戦後体制を右から全面的につきくずす軍事大国化・改憲攻撃と結合された階級闘争としての位置付けが必要だ。

②三里塚・ジェット闘争は、八〇年代における階級闘争の激化・発展をもたらしている。この闘いの大爆発に恐怖した支配者階級は、闘いの主体である動労千葉・反対同盟の解体を狙って攻撃をかけてきており、八一・三闘争の成果・教訓をしっかりとうち固め、継承・発展をはからなければならない。

とし、具体的な取り組みは、①教育・研修会の開催 ②反合・運転保安闘争の強化 ③木原線廃止反対の闘い ④「内達一号」改悪攻撃に対して専門委員会の設置 ⑤支部毎にダイヤ検討委員会の設置を提起し満場一致確認決定した。

討論では次の様な意見が出された。

①「内達一号」改悪攻撃に対する取り組み ②構内運転係の技術断層 ③運転保安確立 ④ダイヤ検討委員会の設置と学習会の強化、等数多くの意見が出されたが、今日われわれが置かれている厳しい状況を打開するため、全会員の英知を結集して闘うことを確認した。

新役員体制

会長	西森 厳（四二・電運士）	千 転（再）
副会長	大岩 定雄（四二・機関士）	新小岩（〃）
事務長	安田 庄一（四二・電運士）	千 転（〃）
執行委員	向後 正三（四五・〃）	成 田（新）
〃	深見 四郎（三九・〃）	津田沼（再）
〃	渡辺和志男（三五・〃）	勝 浦（〃）
会計監査	萱野 昌美（四二・機関士）	佐 倉（新）
〃	小野 信（三八・〃）	蘇 我（〃）

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！